

虫い喰マ

6号<通刊11号>

● 特集・原潜 ●

ファイズ
バンカーヒルが
やって来る!



● インタビュー / 吉永 小百合

300円

特集・原潜

前号の「トマ喰い虫」で（といっても、もう1年と8カ月も前のことだから、すっかりおわすれでしょうが・・・）私たちは「海につながる。海でつながる」をテーマに、核の海にされた太平洋と、そこでの人々のたたかいを特集した。海にうかぶ「島」にくらしているはずの私たちが、海の核化、軍事化に対して、どこかのんきではないか、という想いが特集の根底にあった。1年8カ月たって、海の核化・軍事化はより深刻になった。INF（中距離核戦力）『全廃』条約は、陸からINFを引き上げることには約束したが、その分、海に集中配備するという結果を生み出し、今、われらの海（北西太平洋）はトマホークというINFのひしめく「核の海」となってしまった。

トマホーク配備対象艦の半数が攻撃型原子力潜水艦。トマホークの実戦配備とともに日本への寄港が急増した。今号の「トマ喰い虫」は、トマホークをふところに、われらが海をかってきままに動きまわる「動く原子炉」、軍事機密のカタマリ「原子力潜水艦」にスルドクせってみた。

なお、6人の方の原稿はほぼ1年前に寄せられたものです。従って、文中「今年」とあるのは87年のことです。6号の発行が大幅に遅れたことをお詫びします。（編集部）

アメリカの核戦略と原潜

●青木雅彦（トマホークの配備を許すな！全国運動）

潜水艦の特長は、その名の通り水の中に潜ったまま探知されずに相手を攻撃できることにある。しかし動力にジゼルなどの内燃機関を用いる以上、どうしても水上からシュノーケルなどで酸素を供給する必要があり、これが敵に探知される原因になっていた。乗員

が耐えられる限り水没したまま行動できる真の意味での潜水艦の動力源を探していた米海軍が、酸素を必要としない核分裂エネルギーの発見に逸早く着目したのは当然だった。結局海軍は優先権を後から出てきたマンハッタン計画に譲り、原潜の就役は一九五四年にず

れ込んだが、この点で原潜は二十世紀の人類に核兵器と原発というパンドラの箱を提供したそもそもの「発起人」と言える。

現在米海軍の保有する約百四十隻の潜水艦の97％は原潜。そしてこれら原潜は特殊な任務のものを除いて、戦略原潜か攻撃型原潜の

いずれかに大別される。

△戦略原潜（SSBN）▽海中発射の弾道ミサイル（SLBM、射程五千七千km）を積む原潜。ICBM（地上発射弾道ミサイル）、爆撃機と共に、ソ連本土を直接攻撃するいわゆる戦略核の三本柱の一つだが、核弾頭数ではこの丁度半数を占め最も比重が重い。母港を出て60日間、所在を隠すために海中に潜ったままいつでもミサイルが発射できる態勢を取る。SSBNは米本土が先制攻撃された場合の報復攻撃の任務を担っているが、この「わずか」35隻の原潜の

総核弾頭数は約六千（一発は広島原爆の5倍）、その「任務」を果たし終えた時が地球の最後を意味する。

△攻撃型原潜（SSN）▽基本的な役割はソ連の原潜攻撃、逆に米国のSSBNや空母の護衛も引き受ける。横須賀などに寄港するのはこちらのタイプ。最近日本へのSSN寄港が急増したのは、米海軍の戦略が攻勢的な方向に転換、開戦の早い時期にソ連のSSBN（太平洋側ではオホーツク海が拠点）を壊滅させるという一し、日本近海でのソ連SSBN、SSN

対米SSNの水面下の角逐がエスカレートしているためである。84年からはこのタイプが戦略核トマホークミサイルを搭載し始めSSBN的な任務に代わりつつある。

このためソ連原潜のハンター役割を日本の海上自衛隊が分担せざるを得なくなった。海自のP-3C対潜哨戒機（百億円）の百機購入計画などがその表れである。かくて米原潜は我々の命だけでなく、財布の方も日常的に脅かすまでになっているのである。

安保と原潜

●山川暁夫（評論家）

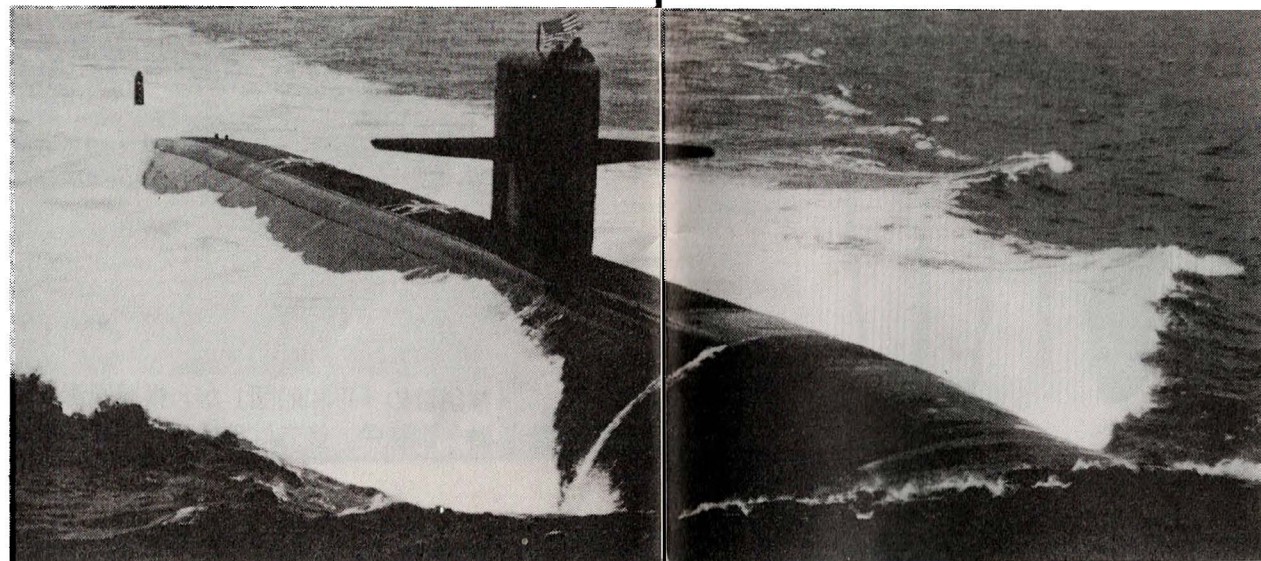
「水にもぐった抑止力／海なら基地料いりはせぬ／その上本土と無関係」

有名な米原子力科学者のラップ博士が、その著『核戦争になれば』で紹介している「原潜小唄」。この原潜の本質をもっとあからさまに述べているのが、原潜戦略の発案者であるO・モルゲンシュタイン教授の次のような説明です。

「われわれが基地を設定していくことが、近くの都市の運命を決める。このことは人口密度の高い海外基地では、一層あてはまる。これらの都市は敵の攻撃を免れない。……とすれば、われわれ（アメリカ）はどうすればよいのか。答えは簡単である。われわれの基地を水中に、海上に、そしてその上空に配置することである。これ

を海洋システムと呼ぼう」（『米国防の諸問題』）

原潜とは「動く核基地」にほかなりませんが、こうしたいい分は、同時に原潜の寄港の根拠になっている安保条約が、日本を守るためというものでなく、アメリカの安全のための人身御供にするだけのものであることを率直に物語っています。よく知られているように、



日本への原潜寄港は、六十年の安保改定の直後に米側から申し入れがあり、六四年の十一月十二日の「シー・ドラゴン号」の佐世保寄港で始まりました。このことによつて、アメリカの対ソ戦略上の初発の基地であるとともに、アジアの革命的情勢への抑圧の基地として日本の役割は、決定的に高まりました。

日本には非核三原則があることになっていますが、それは、米核抑止力への依存を前提にした政府の「核四政策」(他の二項目は核軍縮と原子力の平和利用)の一つにすぎません。しかも七八年十一月の「ガイドライン安保」(日米防衛協力指針)ははっきり「米軍は核抑止力を保持し、即応戦力の前方展開につとめる」と明記してい

ます。事実また米原潜と自衛隊との共同演習が、P3Cの大量導入なども含めて次第に強化されているだけでなく、米原潜の活動に指令を伝えている愛知県佐美のVLF(極長波)通信基地などが安保に基づいて活動を続けているのが実情です。

原潜の事故と放射能汚染

●服部 学(立教大学教授)

横須賀に寄港するアメリカの原子力潜水艦は、熱出力六万キロワット程度の動力用原子炉をつんでいる。一九八六年四月に大事故をおこしたチェルノブイリ原子力発電所の原子炉の熱出力は三二〇万キロワットであった。原潜の原子炉自体が事故をおこせば、チェルノブイリの五〇分の一程度の規模の放射能放出は十分におこりうるということである。

さいわいなことに、これまで原子炉自体の事故はおこっていない。しかし原子炉の事故がおこらなくとも、原子炉をつんでいる潜水艦

のほうが事故をおこして沈没すれば、原子炉も海底に沈んでしまうことになる。一九六三年四月にはアメリカのスレッシャー号がボストン東方の海域で沈没したし、六八年五月にはスコビーオン号がアゾレス群島沖で沈没している。ソ連の原潜も、日付を覚えていないが以前にハワイ沖で沈没したし、八六年十月にも大西洋で沈没している。

いずれも水深の深いところに沈没したので、海洋の放射能汚染は検出されていないが、もっと浅いところだったならば、海水ばかり

でなく、水産物の汚染がおこっても不思議はない。

一九八一年四月、鹿児島沖で米原潜ジョージ・ワシントン号が日昇丸に当て逃げ事件をおこしたが、あの時だって日昇丸ではなくてジョージ・ワシントン号の方が沈んでいた可能性もあったわけである。この他にも、原子力潜水艦の衝突事故は世界の各地でおこっている。

一九六三年、米原子力潜水艦の日本「寄港」問題がおこったとき、当時朝永振一郎先生が会長をしておられた日本学術会議は、三月に「原子力潜水艦の寄港は、一時的

な原子炉設置と同様に考えられるべきものであり、安全性の検討と確認を行なつてその結果を国民に明らかにすべきである」ことを勧告している。しかし日本政府は原潜の原子炉の安全審査を行なうことなく、「寄港」を承認した。

そして一九六八年五月、佐世保に入港した原潜ソードフィッシュ号は、「異常放射能事件」をひきおこした。専門家会議の検討の結果によつても、これは一次冷却水の放出以外に原因は考えられないということであった。

実はこの事件以後、アメリカの

原潜基地の湾内の海水の放射能バックグラウンドの測定値が一けた近く下っている。おそらく一次冷却水の放出を規制する何らかの改善が行なわれたのであろう。

しかし現在は何百隻もの各国の原潜が世界の海中をはしりまわっており、冷却水ばかりでなく、イオン交換樹脂などの投棄による海洋汚染をおこしている可能性もある。ただしこれは放射能が非常に弱いので検出は困難である。

なお、原潜による海水の放射能調査については、日本分析化学研究所が測定データをねつ造してい

たことが、一九七四年一月に国会で明らかにされた事件のあったことを忘れてはならない。

もちろん原潜の原子炉の事故よりもずっと恐ろしいのは、つんでいる核弾頭の事故である。以前には横須賀に入港する米原潜がつんでいたのはサブロックという核ロケット魚雷だけであったと思われるが、最近では水爆弾頭をつけた核巡航ミサイル・トマホークをつんでいると思われる原潜がしょっちゅう入港するようになってきているのである。

原潜と原発

●高木仁三郎(原子力資料情報室)

原潜と原発ということですが問題にしたいことは、自衛隊はなぜ原潜をもっていないのか、ということだ。そんなことはあたりまえじゃないか、という人が多いかもしれないが、実はこれはとても微妙な問題なのだ。

日本政府の最近の見解にたてば、核爆発によって直接に人を殺傷したり、物理的破壊をもたらすもの

でない限り、核兵器ではない。従つて、爆発によってX線を生じさせ、これによって破壊を生じさせるX線レーザー(SDIの重要な要素)は、核兵器にはあたらない。従つて、SDI参加は核兵器の研究・開発にはあたらない、という驚くべき見解が生れる。

ましてや、動力として原子炉を用いる原潜は、核の軍事利用には

あたらない、ということになる。とすれば、彼らの考えに立つ限り、原子力推進の潜水艦を建造することは、彼らの非核三原則や原子力基本法の上からも必ずしも禁じられたものではない(原子力基本法の平和利用条項からは問題が生じるが、この点も後述するように微妙なのだ)。そして、原潜をつくる



横須賀の「平和船団」が、模擬原潜を追跡・訓練中。後方はアメリカ海軍基地。

りたくてしようのないことにちがいない。それではなぜ、彼らはそこに踏み切らないのか。

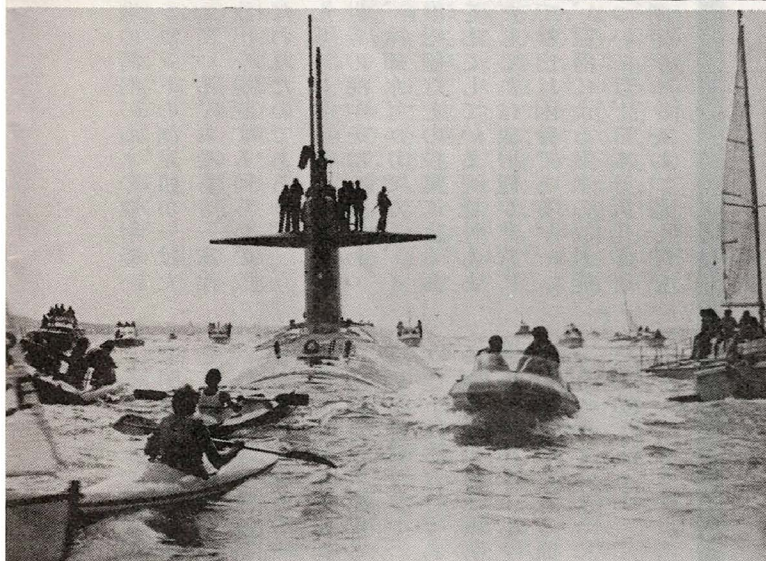
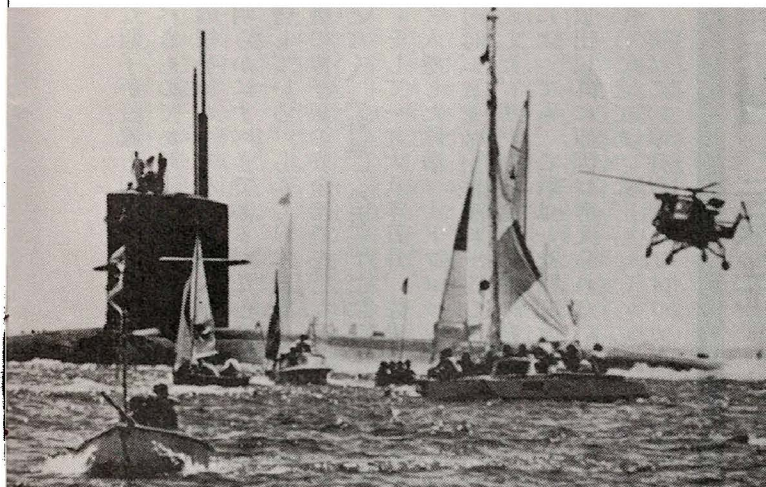
もちろん、原潜は私たちの誰がみても核の軍事利用で、いま自衛隊が原潜をもつといったら、大きな反対が起こるだろう（原潜はその性能上の攻撃性という面からも問題にされねばならないが）。政府もそれを知っているから、政治的にはひかえている。しかし、この歯どめは、実はとても微妙だ。軍事利用するかしないか、政府の用

いている基準は、一般化原則と言われるものだ。宇宙平和利用条約にもかかわらず、自衛隊が通信衛星を利用できるのは、それが既に広範な用途に用いられている、「一般化した技術」だからだ（だから自衛隊の通信衛星利用は、ことさらの軍事利用にはあたらない）。

同じ理由で、原子力動力への船舶への利用が一般化した技術ならば、原潜をつくり、利用することにも「平和利用」の範囲ということになる。彼らが原潜の建造にまだ

踏み切れないのは、原子力の動力利用が現状ではさながら軍事利用に限られているからだ。

ここで浮かび上がることは、もし原子力船「むつ」が成功し、原子力船が「一般化」していたなら、原潜を自衛隊がもつ根拠ができたのだということだ。むつが止められ、廃船となることになったことで、原潜も阻止されたといったら、単純化しすぎるかもしれないが、この連関は一般に注目されていないが、たいへん重要だと思う。



原潜をとめたニュージーランドの「平和船団」

原潜はなぜ寄港するのか

●石川 巖（朝日新聞記者）

横須賀にロサンゼルス級オマハが入港したとき、ハワイからかけつけた乗組員の妻たちが岸壁で出迎えているのを見たことがある。

「一週間の休暇を夫と横須賀で過ごすのよ」といっていた。野菜入りのダンボール箱が岸壁に山のように積み、出港まぎわのスレッシュヤー級パーミットの艦内に次々に運び込まれるのを見たこともある。

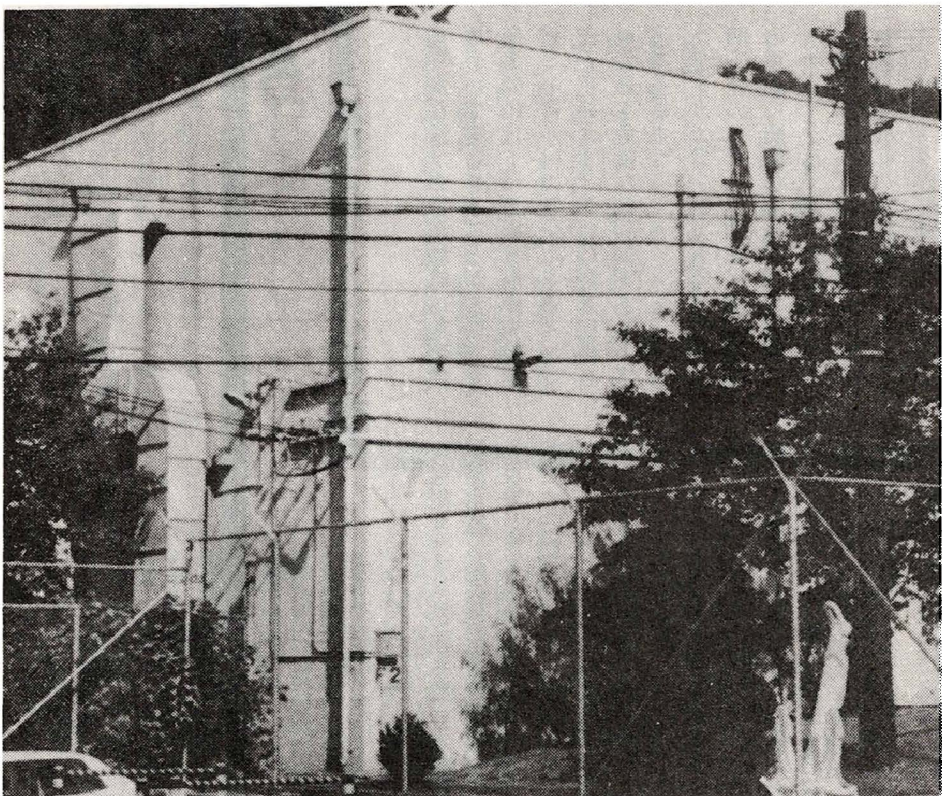
米原潜が日本に入港する際、米海軍当局が外務省に通告してくる入港目的は、常に「休養と保給」である。冒頭の経験からすると、ケースによっては確かにそれが入港目的の一つになっている場合もあるようだ。

さらに体験的にいうと、修理と乗組員の一部交替というケースもある。入港中の原潜の艦橋にヤグラを組んで修理しているのときどき見かけるし、何人かの乗組員が横須賀で入れ替わる事例もある。もう一つ、見逃せないのは、横須賀における米第七艦隊の第七四潜

水艦任務部隊の存在である。この部隊は別名「潜水艦作戦統制センター」と呼ばれ、上瀬谷にあるソ連艦船の動きに関する情報を集中している施設「艦隊海洋監視情報施設」と密接につながっている。米海軍の内部資料では、同部隊の任務は「西太平洋、インド洋に展開している米原潜の作戦配置を決定し、作戦行動を課すことである」と説明している。

米原潜の日本入港の主要目的は、おそらくこの「潜水艦作戦統制センター」との作戦上の連絡にあると思われる。事実、この部隊の司令官は原潜の横須賀入港のたびに岸壁まで黒塗りの車で出迎えに現れる。

十日か、二週間で同じ米原潜が横須賀に反覆寄港したり、わずかな数分の沖合い停泊をするケースがよくあるが、それもこの部隊との連絡のためとすれば事情がみこめる。「ソ連に対する示威も兼ねているでしょう」と見る海上自衛隊の幹部もいる。



第74潜水艦任務部隊司令部

昨年秋から沖縄のホワイトビーチにロサンゼルス級がしばしば現われ、三十分前後の沖合い停泊をするケースがふえた。トマホーク発射用の新データ（磁気カセット）をとりくるのか……と推

定してみたが、ホワイトビーチではトマホーク配備以前から沖合いの短時間停泊という例が多い。昨年来日した米ミサイル原潜のブッシュ元艦長は、「米攻撃型原潜の主要任務の一つは、コミント（通

信傍受）、エリント（電子情報収集）なんだよ。短時間の寄港は収集した情報を届けにくるんじゃないかね」。そうやってニヤリと笑いがらウインクした。

トマホークと原潜

●梅村中宏道（トマホークの配備を許すな！全国運動）

巡航ミサイル・トマホークは、現在もアメリカの新しい軍拡政策を代表する最もホットな兵器体系の一つである。八七年の二月、「海の軍備撤廃を！太平洋運動」が東京でコーディネーティング会議を開いたとき、ワシントンから直接に電話で問題提起をした著名な核戦略研究家ウィリアム・アーキン

は次のように述べた。
『私の見解としては、アメリカの海洋戦略について関心が高まって来ていると思います。そして次の二年間の米議会において、レーガンの軍事プログラムについて強く追及しようと思っています。海軍の強化と攻撃的な海洋戦略は世論の注目をあびるでしょう。……ですから、この先数年間は人々に

挑発的な米ソの海洋戦略の危険性について知らせることが大切です。個人的にはトマホーク海洋発射巡航ミサイルはカギとなるポイントだと思っています。それは最近配備された最も危険な核兵器であると主張できます』。

アメリカは一九九五年までに約四千発のトマホークを、約二百隻の軍艦に配備しようとしている。

トマホークは、核、非核両型があるが、そのうち七五八発が核弾頭つきトマホークである。

トマホークが装備される軍艦は大別して水上艦（戦艦、駆逐艦、巡洋艦など）と潜水艦に分類できる。潜水艦には戦略ミサイル潜水艦（大陸間弾道弾とよばれる現在の核抑止力の中心となるミサイル

を発射するための潜水艦）と攻撃型潜水艦（敵の潜水艦を追跡したり攻撃したりすることを主たる任務とする潜水艦）の二種類があるが、トマホークが積まれる潜水艦は後者の攻撃型原子力潜水艦である。

一九八四年の米議会資料によれば、約四千発のトマホークのうち水上艦に載るものは約六五％、潜水艦に載るものは約三五％である。核トマホーク七五八発のうち四八八発が水上艦に、二七〇発が潜水艦に搭載される予定である。

トマホークとの関連において原子力潜水艦を考えると、いくつかの忘れてはならないポイントがある。

一、原潜はトマホーク搭載の最

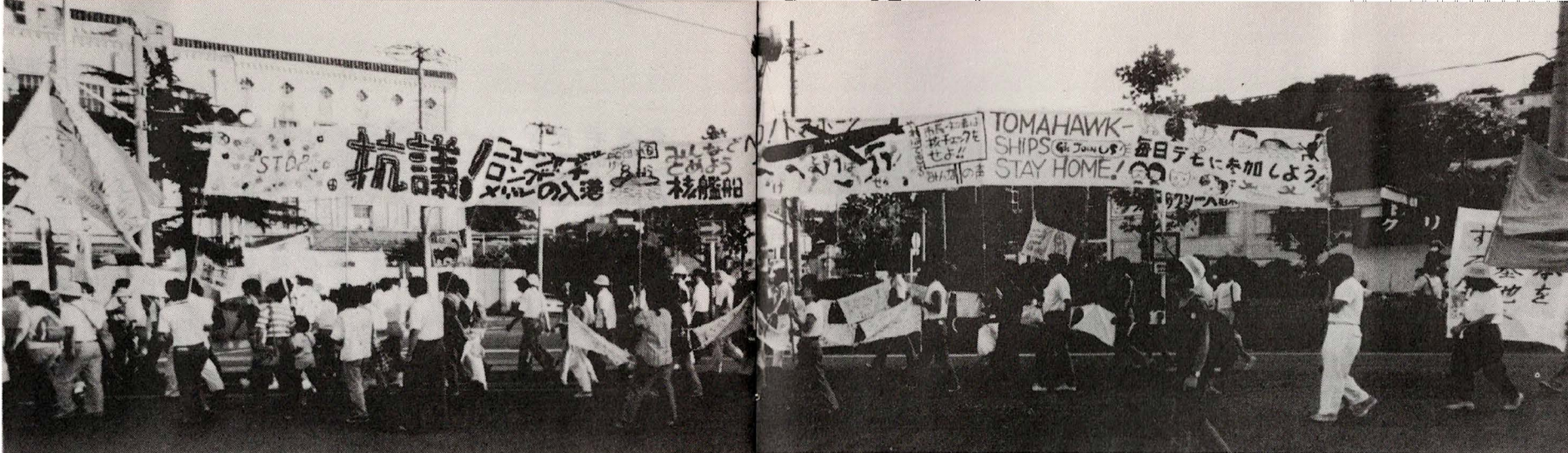
るが、この海洋発射核戦力は野放しにされ、むしろINF交渉の進展とともに一層危険な状態になることが心配される。

英原潜が冷却装置故障、あわや核事故

【ロンドン十四日時事】十四日付の英日曜紙「オブザーバー」は、先月下旬、同国スコットランド西岸のファスレーン海軍基地に停泊中の英原子力潜水艦で、原子炉の冷却装置が故障し、あわや核事故という重大な事態が発生していたことが明らかになった、と報じた。

同紙によれば、事故が起きたのは、ボラリス型原潜の「レゾリューション」。原子炉の第一次冷却システムで、冷却ポンプへの電力供給が突然停止、異常時に作動するはずの予備のポンプ二本も作動せず、そのうえ緊急電力装置も働かなかった。

このため炉心温度が上昇、警告音が鳴り響き、事態は炉心溶融に向かっていたが、乗組員二人がディーゼル発電の予備冷却システムを作動させた、事なきを得たという。ただ、この二人の乗組員のうち一人は被ばくしたとみられている。



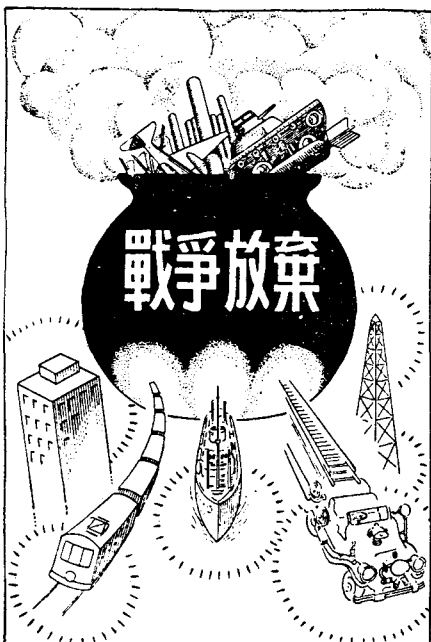
そして、海のチェルノブイリ・・・。

88年2月15日の毎日新聞の記事は、あつかいは小さいが、おどろくべき事実を伝えた。停泊中の原潜が、原子炉の冷却装置の故障をおこし、炉心溶融にむかった、というのだ。

最悪の事態はさけられたようだが、原潜の原子炉も原発のように暴走する、ということはしっかりおぼえておかなければならないだろう。

の
は
な
し

トコ喰虫
インタビュー

[illegible]『復刻版
あたらしい憲法のはなし』

一九四七年五月に日本国憲法が施行され、その公式の解説書として中学社会科一学年用に発行されたもの。解説に大江志乃夫、池田理代子、鎌田慧さんなどの文章が加えられている。田浪さん夫妻のイニシャルをとって名づけられた永絵夢（エーエム）社出版局発行発売元は新泉社（03-9151-6662）。

そんなにバデに「戦争反対」って
叫んでいるわけではないけれども、
自分の信念として、きちつとそういう
ことはいえるような人間でいたい。

吉永 小百合 (女優)



反核アニメーション「ひやくばんめのサル」のナレーションをされたり、平和について発言されているが、核とか戦争についてどんな思いを持っていますか？

戦争というのは、やってはいけないことだ、人間が人間を殺すっていうことはあってはならないことだ。ただ、それだけの自分の感情でいっているだけで、そんなに深い思いでいっているわけではないんです。「夢千代日記」というドラマをやらせていただいて主人公、が広島で胎内被爆をしたという設定になっていますので、そういうことを通じて広島島の被爆者の方と交流したりして、やっぱり核兵器というものの恐ろしさはヒシヒシと感じますね。

いま、いろんな運動がありますでしょうか？

黒柳徹子さんは、難民救済ということでもって努力していらして、この間も戦闘機一台やめれば、本当にアフリカじゅうの子供たちが予防接種を受けられるんだっていうことをおはなしになったそうなんですけれども、私は自分が心に思った戦争に対する嫌悪感みたいなものは、自分が発言できる機会にはきちんと話したいなっていうふうに思っています。

父は戦争に行っていて、病気になるまで途中で復員したんです。そうでなかったら、私は生まれていなかったかもしれないですね。

母からは、いかに戦争が大変なものだったかは聞いています。私が生まれたときは、東

京大空襲の直後でしたから、ミルクもなく防空壕で生まれたようなもので、そういう状況は聞いていましたけれど、だから戦争は良くないんだとか、そこまでは親はいわなかった、という辛さがあつたかは聞いています。

いまの世の中、防衛費GNP1%枠突破とか、スパイ防止法とかイヤな時代になってきたと思うんですが……

本当にそうですね。そう思います。それと防衛費がGNP1%枠を越えたっていうことにしても、国会で誰も取り上げなかったって、ニュースステーションで久米さんがいつてらっしゃいましたけれども、どんどん歯止めがきかなくなるのはとても怖いし。憲法には戦争放棄っていうか、軍隊を持たないっていつているのに、おかしいなって思いますね。それからスパイ防止法は、売上税以上にとかく人間が人間として生きられなくなるというようにね、怖い法案だから気をゆるめないで、皆で通したりしないようにしなくちゃいけませんね。

以前、税金の確定申告のときのことか新聞やテレビで取り上げられましたね。「税金を軍事費に使わないで」と、竹下大蔵大臣(当時)にいったというので……

とにかく、すごく嫌なんですよ、行くのは。竹下さんがいらつしやるっていうから、

そういう目立つ時は、私は行きたくないってお断りしたんですけれど、でもなんとかっていうから、じゃあいいたいことはいいますよ。それでもいいなら行きますよって(笑)。

——勇気ある発言ですね(笑)。

あんまり自分では、そうは思わないんですけど。年齢的なこともあると思うんですよ。二十代の頃は、そういうふうにも思っても、なかなかはっきり口に出してはいえなかったと思います。でも、やっぱり三十なかばくらいからは、本当に自立するっていうことは、自分で自分の意見をいえることなんじゃないかって思うようになって。それと、「はい」と「いいえ」をきちんといえる人間になりたいって、少しそのへんから大人になったっていうか、自立できるようになったって、自分では思います。

——みんなから視線をあびる場について
その人が、発言をする。小さなひとつの発言でも、みんなが勇気づけられることがあるんですね。

そうですね。それと、本当に地味に一生懸命、運動している方がいらつしやるんですね。若い方ですね。そういう方は、とても応援したくなるんですね。五年ほど前に、早稲田大学に国際軍縮学連というのをつくるときに、早稲田の男の子たちが一回ぜひ会って下さいって手紙をくれたんですね。手紙がとっても真剣で素晴らしいかったのと、お会いしたら本当にいい目をしていてっていうか、こういう若

い人がまだいるんだなってとってもうれしくなつちやって、それからつながりができたんです。

大きな集会でワーツ騒ぐことよりは、地味でも長く続けなきゃいけないって気がするんですよ。それはもう、続けるっていうことは大変なことだと思っただけでも、頑張っていたきたいし、私もそんなにバデに「戦争反対」って叫んでいるわけではないけれども、自分の信念として、きちつとそういうことはいえるような人間でいたいと思います。

——外国の役者さんでは、人権問題や社会的問題に取り組んでいる人が多そうですね。何か、日本の場合はいろいろ事情があるんでしょうけれども、いいづらいみたいですね。

本当はないんですけどね。外国の場合は俳優の立場とか地位がとても高いんですね。映画とか演劇が文化的に、芸術的にきちんと認められていて。日本の場合は、売上税でもそれでいいけれども、歌舞伎だけは特別に保護されるけれども、あとのものはダメだっていうような感じで、映画、演劇っていうのは、そういう意味ではレベルを低く、社会的に見られていないということもあるんだけれどもだからみんなも黙っちゃっているところもあるし、あるいは勉強していかなくて、社会的発言ができないからなお、レベルアップしないっていう部分もあるんだと思います。その辺はどっちが先かわかりませんけどね。



「自分の考えをわかってくれる人が10人のうち2人でもいいって・・・」

八六年四月にソ連のチェルノブイリ原発で事故が起きたころ、ヨーロッパに行かれていたそうですがいかがでしたか。

ちょうどその事故の直後に行ったの。一週間後に、ウィーンとかチェコとか行きまして東京から九州くらいしか離れてないんですけどチェルノブイリと。一、〇〇〇キロ。本当にもろに放射能が来ていましたし、牛も全部、表に出さないようにしてました。雨が怖くてね。雨にあたりたくないと思いました。

私は科学的なこととは分からないけれども、原子力発電所もないほうがいいと思ってます。みんなこれだけ頭がいいんだし、技術も進んでいるんだから、それに変わるエネルギーをみつければいいんじゃないかと、そ

んな危険なものには絶対に、結局自分たちの大事な地球が減っていくわけだから、ないほうがいいと思いますよね。それと、みんな無駄なエネルギーを使わないようにして、原発に頼らなくてもいいようにね。

トマホークを積んだ原潜や軍艦が入港するたびに、私たちは「核艦船ノー」の声を上げているんです。ところが、日本政府から返ってくる答えは「非核三原則があるから大丈夫」だけ。みんなおかしいと思ってるのに・・・。

そりゃ思いますよね。日本に来る時だけ、どこかへ置いてくるっていうのは不可能でしょう。だから、政治家ってタヌキみたいな人ばかりでしょう(笑)。こっちは、どうい

うところを、どうやって尻尾を捕らえたいかっていうのもあると思うんですけど・・・。ところで、日本の反核や反戦運動について、何か一言ありますか？

原水禁と原水協ですか、あれに象徴されるみたいに、本当に原爆を落しやいけないと思えば分裂するわけが無いものが、イデオロギーでわかれちゃうっていうのは、とても残念ですね。でも、そうじゃない、イデオロギーじゃないところから、戦争は嫌だなんて思った人たちが、これからどんどん増えていくことしかないと思います。

いろいろな機会に発言されることが多いと思いますが、注目される立場だけに、シンドイかなあとも思ってしまうんですが・・・。

いえ、そんなこと全然ないですよ。前はね。やっぱりみんなによく思われたらいいと思ってたんですけどね。いまはそういうこと思いませんし、自分の考えとかをわかってくれる人が、十人のうち二人でもいいって・・・。

何もできないんですけど、ただもう、小さなことでもいいから、みなさんと一緒に長く続けたいと思うんです。

お忙しいなか、本当にありがとうございます。

(八七年五月 東京・新宿厚生年金会館楽屋にて)

ざいふ

若い世代に希望をはぐくむ

花崎皋平

す。

このごろうれしくてしかたがないこと、そして前途に光明を見る思いがすることがあります。それは、私の二人の娘たち――もう二人とも、成人に達し、大学も卒業した――が、それぞれのやりたい道に進みながら、社会的な諸問題への関心を私と共有してくれつつあることです。

一人は演劇を活動の場にしながら、フィリピンとの連帯運動やフェミニズム運動にかかわり始めています。もう一人は、ヨガからエコロジー、原発問題、そして先住民問題などに関心を寄せていま

いるようです。札幌の私の身のまわりでもそのしるしが見られます。社会的な矛盾を自分で考えたり、堅い本でも手にとって読んだりする傾向が、わずかつづでもふえてきているように思えます。

その歩みには、心身の成長とおなじようにある一定の順序があり、その順序を無視した働きかけをしただめだという気がします。まず自分とのかかわりでわずかなどつかかりができる。たとえば、からだを悪くして、身体問題や食べ物のことに関心をもち、そこから原発や核の問題へすこしづつ近づく。その接近の歩みは、チェルノブイリ事故などがあると急に早まりますが、日本社会に関する問題の場合、かなりゆっくりで、一步一步、いろいろな抵抗にぶつかりながら、自己形成していく歩みと平行して、のようです。

しかし、大学を卒業すると大方の若者は企業に就職して働き始めます。ここからが主体形成にとつては肝腎な時期なのですが、ここで一挙に視野を狭められ、自己形成の歩みを断たれ、企業教育システムにまきこまれて、断念、あきらめ、同調、保身などなどの態

度を装わされるのです。

私たちの市民的諸運動は、それらのヤングアダルトに対する働きかけ、自覚化、主体化の活動に、これまでは成功してきませんでしたが。ピラくばり程度しかできず、ぼう然と手をつかねてすごしてきたといっても過言ではないと思います。

しかし、ここへ来てその対応もさまざまセミナーや市民学校のようなかたちで遅ればせながら緒についてきています。希望が生まれつつあります。私個人のなかにも――。

性急に成果を求めないこと、希望をはぐくむこと(現実的に可能な未来のヴィジョンが必要)、自分史と社会史とをかきねてとらえる方法を自覚的にとり入れることなどが、若い世代との関係では必要ではないかと思うようになってきます。自分史と社会史とをむすびつける方法を意識してとり入れる必要は、以前の世代のように、経済学を範型として社会科学の学習から入るといった教養形成の方法が、時代に適さなくなっているという認識からです。

TOMAHAWK

DATA

アメリカの研究グループ「ノーチラス」が情報公開法で入手した米太平洋艦隊最高司令官通達によって、地形を読みとりながら誘導される対地攻撃型トマホークの内蔵データがどのようにしてトマホーク搭載艦に輸送されるかが明らかになった。D T Dと呼ばれる磁気ディスクの形で

輸送されること、核攻撃用のデータ・ユニットには2人の人間が常に付き添うこと、など興味深い内容が含まれている。頭の部分の抄訳だが、その全体像を想像するのに役立つと思われるので、ここに訳出する。

(梅林 宏道)

トマホーク発射データは磁気ディスクで運ばれる。

米太平洋艦隊最高司令官通達
(1985. 5. 6)

太平洋艦隊最高司令官通達

3330・5

発信：太平洋艦隊最高司令官
主題：トマホーク・データ輸送デバイス(D T D)との関連文書の配布

1、目的 トマホーク対地攻撃型ミサイル(T L A M)のD T D及び関連した指揮・統制文書の太平洋艦隊管内の配布、保安、出納事項を指示すること。

2、範囲 この通達は太平洋艦隊管内のすべてのトマホーク可能艦とその艦船の作戦指揮権をもつ参謀に適用される。

3、背景

a、通常弾頭型(T L A M/C)と核弾頭型(T L A M/N)の対地攻撃型トマホークは、海軍の陸上攻撃能力を大幅に拡大し多様化した。トマホークのミサイル誘導システムに対して、ミサイルの飛行の陸上部分を規定するために用いられるデータは戦域任務計画センター(T M P C)で作成されD T Dに記録されるD T Dは、洋上艦や潜水艦の兵器コントロール・システムに適合するハードウェアのついている一種の磁

ればならない。

b、データが書き込まれた付属文書を伴った任務D T D、システムD T Dとも、通常、太平洋軍最高司令官司令部戦域任務計画センターから軍輸送隊(A R F C O S)を通して輸送される。すべてのデータを消去したD T Dは付属文書(1)に従って軍輸送隊以外の追跡可能な手段で輸送することができる。

c、核任務D T Dも通常任務D T Dも、1年ごとか半年ごとに周期的に改訂される。個々の版(たとえば、S U B-84-2 Nならば、1984年の潜水艦向け核任務用第2版であり太平洋軍最高司令部で承認された核弾頭型対地攻撃トマホークの確定された一組の任務を内蔵している)にどの任務を含ませるかについて一たん決定が下されたならば、同種の船やトマホークの型に対するそれ以後のすべてのD T Dに任務は、次の版が発行されるまで変わらない。参謀用の指揮・統制任務データ・ホルダー(訳注参照)は、D T Dと同時に改訂され、改訂と改訂の間では必要に応じて伝令によってアップデートされる(たとえば、到着確率の数字の変更など)。通常弾頭型トマホークの任務の改訂やその完全な任務の電子的な伝達のために任務データ・アップデート(M D U、訳注参照)を使うことは、作戦上の緊急手段としてのみ考えられており、ルーチンとしては使用されない。新しい版のD T Dは、発効すると同時に配備中の船に輸送される計画である。発射艦船は地理上のどこに位置しているかによって異なる時間にD T Dや任務データ・ホルダーをうけとることになるので、2つの版のD T Dや指揮・統制任務データ・ホルダーが太平洋艦隊内で効力を持つような過渡的な期間が生ずる。D T Dの交換

TOMAHAWK

DATA

の通知は全関係者に伝令により行なわれる。

d、D T Dが船に届くとき、任務D T Dを補足する発射艦用文書がそれに付随する。これらの文書は、D T Dがその船に保持されている限りアップデートをする必要はない。

e、発射艦用の最初のD T Dパッケージは、通常、ミサイルの積み込みの前に、あるいはそれと同時に発射艦船に届けられる。太平洋軍最高司令部戦域任務計画センターにより発せられた任務D T Dは、不用になったとき返還されなければならないまず、すべての核認可された任務D T DとシステムD T Dは、分析のためにすべてのデータに触れないで、2人の人間の統制下に軍輸送隊を通して太平洋軍最高司令部あてに返還される。他のD T Dは返還の前に付属文書(3)に従って消去される。補足文書はD T Dが返却されたとき破棄され、その旨太平洋軍最高司令部へは報告、太平洋艦隊司令官と必要な分野司令官には通知、がなされる。

f、アメリカ合衆国以外の飛行ルートに対する実際のデータやシミュレートされたデータを含まない訓練用のD T Dパッケージは、機密扱いとされる。実戦用の通常弾頭型対地攻撃トマホーク、および核弾頭型対地攻撃トマホークの発射艦用のD T Dパッケージは最高機密扱いとされとくに実戦用の核トマホークD T Dパッケージは常に2人の人間の統制下に置かなければならない。すべてのデータを消去したD T Dは非機密扱いとなるが、ひき続き付属文書(3)による受領システムによって扱われなければならない。

5、措置

a、参考文献(a)において太平洋軍最高司令官は次のことをするこ

とを示した。

(1)参考文献(a)に従ってD T Dに入力し認可すること。

(2)太平洋艦隊の各分野司令官が要求する発射艦船に届けるためにD T Dを準備すること。

(3)太平洋司令部管内のすべてのD T Dの所在場所のリストをすること。

(4)返還された核トマホーク用D T Dを受け取るよう指定された人員の氏名、階級、通し番号のリストを発行すること。このリストは、核任務D T Dおよび核システムD T Dを軍輸送隊を通して戦域任務計画センターに返還するための使用に供するよう、太平洋艦隊最高司令部、太平洋海軍洋上艦隊司令部に送られ、太平洋艦隊最高司令官に連絡される。

(5)艦隊から返還されたD T Dを受領すること。

b、太平洋艦隊最高司令官は、次のことをする。

(1)参考文献(a)に従って、太平洋艦隊管内におけるD T Dの配布と返還を確実に行うこと。

(2)次のような伝令受信人項目(A I G)を維持すること。

(a) A I G 1 1 2 7 9: 対地攻撃型トマホーク能力をもつすべての洋上艦のリストを含む。これは指揮・統制情報を洋上艦に配布することと任務データ・アップデート(M D U)情報のために用いられる。

(b) A I G 1 1 2 8 0: 対地攻撃型トマホーク能力をもつすべての潜水艦に配布することと任務データ・アップデート(M D U)情報のために用いられる。

(c) A I G 1 1 2 8 1: 対地攻撃型トマホークの能力をもつすべての洋上艦の指揮・統制に関連する参謀と参謀旗艦のリストを含む。これは洋上艦発射用のD T Dパッ

ージの受領と返還の報告と、M D U用の指揮・統制文書の配布のために用いられる。

(d) A I G 1 1 2 8 2: 対地攻撃型トマホーク能力をもつすべての潜水艦の指揮・統制に関連する参謀のリストを有する。これは潜水艦発射用のD T Dパッケージの受領と返還の報告と、M D U用の指揮・統制文書の配布のために用いられる。(以下略)

(訳注) 指揮・統制任務データ・ホルダー

付属文書に次の説明がある。『あらかじめ計画された対地攻撃型トマホークの飛行ルートに関連して、担当参謀がトマホークと戦術空軍対地攻撃計画とを総合することを可能ならしめるような情報のパッケージ』(訳注) 任務データ・アップデート(M D U)

付属文書に次の説明がある。『一隻あるいはそれ以上の発射艦への通常弾頭型トマホークの任務の電子的な伝達は、現在はO T C I X S通信ネット通して行なわれているが、実戦段階ではT A D I X S通信ネットで行なわれる計画である。これは、通常弾頭型にのみ適用され、核弾頭型には適用されない。』



とにかくアイデアを出し合って でもなんでもやりまわす。

トモ食虫
インタビュー
②

オーストラリアの反核グループ PND（注1）のメンバー、ジョー・ヘイターさんは86年4月から約半年間日本に滞在して、各地の反核運動と交流しました。

折しも8月にはアメリカの核艦船ニュージャージーが入港。ヘイターさんも精力的に反対運動に参加しました。

PNDの活動について、日本の印象について語ってもらいました

メンバーは科学者、サラリーマン、主婦、医者、教師など様々

●PNDとはどんなグループなのか？

「PNDはオーストラリアの全国的な反核グループです。そして、どの政党にも属していない独立した市民の集まりです。このことは逆に言えば、どこかの政党に属している人でも入れるということですから。アポリジニ（注2）の土地間

題にも関わっていますが、主な活動は反核運動で、それには3つの目標があります。

「1」核兵器や核燃料の原材料であるウランの採掘をやめさせること。

「2」核を積んだ船の寄港をやめさせること。

「3」アメリカの軍事用通信基地をなくすこと。

PNDは各地にある平和のための小さなグループをひとつにまとめる役割もしています。他のグループと合同でデモをしたり、海外の反核運動とのつながりを作ることも努めています。

メンバーは、科学者、サラリーマン、主婦、医者、教師など様々ですが、これがPNDの長所だと思います。誰にでも参加でき、いろいろな人がいることによって考え方が片寄りません。」

●各人の経験や職業を生かすよう

な運動をしているのですか？

「その通りです。それぞれが自分の分野で力を生かしながら情報交換をするんです。みんなが同じことをあちこちでやるよりもずっと効果的です。その各グループがひとつにまとまって大きな行動することには意味があるんです。」

●女性のメンバーが多いそうですね。

「特に多いというわけではありません。ほとんど半々ですから。でも日本に比べたら多いかもしれませんね。確かに女性のメンバーはパワーがあります。ほとんどが社会的に自立しているし、現状を変える力があるというのを自覚していますからね。女性のリーダーもたくさんいるし、男性も決して男性本位ではありません。」

集会にはいつも保育所を備えているので子供のいる母親でも参加できるんです。もちろん友人同士

で助け合って時間を作ることもあります。集会には子供連れもたくさん来ますよ。集会に来る子供たちは、社会問題に早くから関心を持つようになるし、自分の意見を言ったり、人の意見を尊重することを学べます。大変よい環境で育つことになると思うんです。」

●PNDの活動というと、ボートで大きな軍艦に接近する直接行動が有名ですが、他には具体的にどんな活動をしているんですか？

「オーストラリアでは商業港に艦船が入ってくる場合が多く、日本に比べると状況はオープンです。直接軍艦と交渉したり、船に乗り込んだりします。たとえば観光客のふりをして船に乗り込み、船の上で『寄港反対』と書いた大きな幕を広げます。これはとても効果的で、マスコミはこういうことが大好きですから、大きく取り上げてくれます。また船員に直接電話

をかける、という方法もやりました。何回も何回も電話をかけて電話線を使えなくしてしまうのです。それから船員をパーティーに招待して仕事に戻らせないようにするとか。みんなでアイデアを出し合ってできそうなものとはにかくやっちゃうんです。港でスキングイビングをしたこともあります。航海法で、港にダイバーがいる時は船は入れないんです。ただしこれは見ていてハラハラしますけど

ね。」

●人々の反応はどうでしょう。

「PNDは行動的ですけど、暴力的ではありません。楽器を鳴らしたり、歌ったり、大人も子供もいる。だから人々は恐怖心を持たないし、とび入り参加する人もけっこういるんですよ。」

●日本で平和運動に参加してみてもいい印象をもちましたか？

「まず、オーストラリアと一番違うことは機動隊です。何の武器も

持っていない平和な市民のデモに機動隊がいるなんて、信じられませんが！オーストラリアでは市民のデモに機動隊が来るなんてことはまったくありません。」

私は感じたり考えてたりしているだけじゃダメなんだ、と思ったんです

●ヘイターさん自身が反核運動に参加するようになったのは？

「私は5年前にロンドンにいたんです。その頃、アメリカの巡航ミサイルがヨーロッパに配備されるというので、反核運動がさかんになりました。それまでも社会に対する憤りは感じていましたが、そんなとき私は感じたり考えたりしているだけじゃダメなんだ、と思ったんです。状況を考えれば、私にとって、反核運動に参加することは自然なことであり、当然なことでした。それでイギリスの反核グループのCNDに入りました。今はオーストラリアにいるのでオーストラリアの反核グループPNDに参加しているんです。」

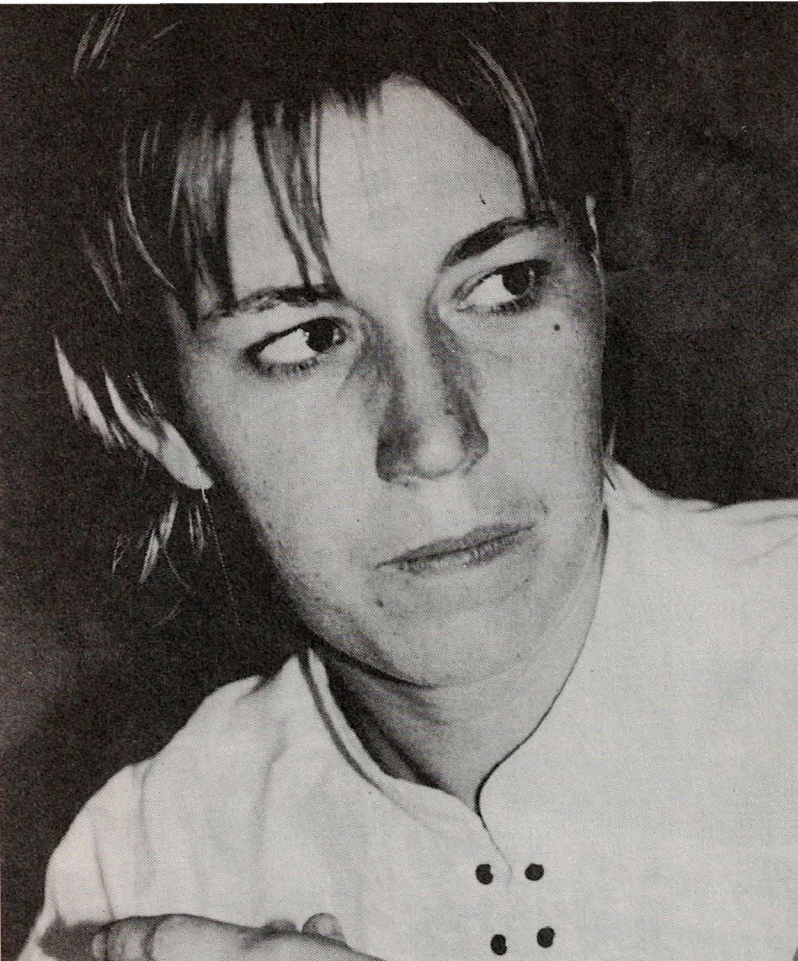
●自然なこと、ということをもっと少し具体的に教えてください。「社会の問題について関心をもつ

かどうか、ということはその人の感受性なのかもしれませんが、社会で何が正しいのか、正義とは何か、を考えると、私は核に反対するというのは自然で当然なことだと思います。そして、アメリカの巡航ミサイルがヨーロッパに配備されるという状況は、私にとっては考えることだけでは充分でなく、直接行動することが必要だという選択になったのです。

ただし平和のための行動と言うのはデモや集会に参加することばかりではありません。また、平和というのは戦争状態にない、という意味だけでもないと思うのです。私は日常生活そのものが平和であることが本来の平和だと思っています。人々の人権が守られ、正義が行なわれること、それが平和ではないでしょうか。」

注（1）People for Nuclear Dismament 核軍備廃止のための人々
——パースに根拠地をおいて活動しているオーストラリアの全国的な規模の市民運動グループ。

注（2）オーストラリアの先住民。



1065のヒロシマ



ファイブ、バンカーヒルがヨコスカにやって来る!

田巻一彦 ● 反トマホーク通信

七一の
トマホークが

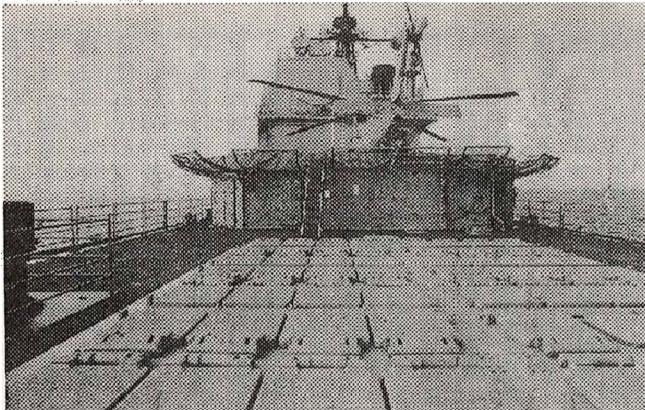
二隻のトマホーク搭載艦が横須賀を母港にしようとしている。駆逐艦ファイブ（七七八〇トン）と巡洋艦バンカーヒル。いずれもトマホーク発射可能な垂直発射装置（VLS）を最近取り付けた。つまりトマホークを搭載するため生まれ変わったばかりの船だ。この垂直発射装置は写真のように船の甲板に縦八列、横八列、合計六十四のハッチ（蓋）が並び、その中にミサイルが垂直にこめられるというもの。地下式のミサイル・サイロがずらりと甲板の上に並んだものと考えればよい。六十四のハッチのうち三つはクレインなどに使われるので、一基でミサイル六十一発を発射出来る。この垂直発射装置をファイブは一基、バンカーヒルは二基それぞれ備えている。

垂直発射装置の特長は、トマホーク以外に対潜ミサイル・アスロックや対艦ミサイル・ハーブリン、対空ミサイルを発射出来ることだ。カーヒルは七十一発の核弾頭型トマホークを搭載して横須賀を母港にする。核トマホークは一発でヒロシマ型原爆の十五倍の破壊力を

では、ファイブやバンカーヒルはどれだけのトマホークを搭載するのだろうか。

一九八四年三月の米下院軍備委員会で、当時トマホーク配備の責任者だったホステットラー海軍少将はつぎのように証言している。「駆逐艦の垂直発射装置の能力は六十一発。トマホークは四十五発装備予定」「巡洋艦の垂直発射装

バンカーヒルのトマホーク
垂直発射機。



置の能力は百二十二発。トマホークは二十六発装備予定」。駆逐艦は「ファイブ」、巡洋艦は「バンカーヒル」と読みかえてよい。つまり、ファイブとバンカーヒル合せて、実に七十一発のトマホークを搭載するというのである。一昨年佐世保に入港した、あのニュージャージーでさえ、トマホークは三十二発だったのだから恐るべき数である。

トマホークは
核付き

もうすぐしデータに立ち入ってみよう。この七十一発のトマホークが「核弾頭型」であるという決定的証拠があるのだ。図は一九八七年三月の米議会軍備委員会に海軍が出したものだ。ファイブとバンカーヒルは空母ミッドウェーを中心とした機動部隊に加わる。その空母機動部隊がトマホークを持つことによって対地攻撃力がこんなに高まるのだ、と海軍は胸を張った。空母を取り巻く水上艦から突き出た長い矢印（対地攻撃距離を表す）に付けられた数字に注目してほしい。一二〇〇NM（カイ

リ）とある。一カイリは約一・八キロだからこれは二二〇〇キロに相当する。これだけの距離を飛ぶことが出来るのは、「対地攻撃用核弾頭型」トマホーク以外にない。同じ「対地攻撃用」でも「通常弾頭型」トマホークの射程距離は一三〇〇キロとずっと短い。「ファイブとバンカーヒルの搭載するトマホークは核弾頭型である」と米海軍が公式に表明しているのだ。

前述のように垂直発射装置は他のミサイルにも使用できる。しかもトマホークには核弾頭型と通常弾頭型がある。だから、と日本政府は「ファイブが搭載する兵器がなんであるか確認する立場にない」（八七年十月一日「朝日新聞」）として、「米国から事前協議の申し入れがない以上、核は持ち込まれていない」というこれまでの姿勢をけつて崩そうとはしない。しかし、このロジックは他でもない米海軍自らの証言によって、とくに根拠を失っているのだ。

INFは

地上から海へ

くりかえそう。ファイブとバン

トマホーク艦、 ファイブ、バンカーヒルの 母港化を止めよう!

持つのだから、一〇六五のヒロシマに相当する途方もない量の核ミサイル発射台が横須賀に据え付けられる。それが母港の意味だ。

横須賀から半径二五〇キロの円を描けば、ソ連極東部の主要な軍事基地はほとんどその中に収まってしまふ。一核発射台が据え付けられるという言い方は決して大袈裟な例えではない。

一九七九年、米国とNATO諸国が中距離核戦力（INF）のヨーロッパ配備を決定するやいなや、ヨーロッパ各地では、猛烈な反対運動がまきおこった。これがヨーロッパを舞台にした「限定核戦争」のシナリオを具体化するものであることを人々は知っていたからだ。ヨーロッパの人々の反核運動は、間違いなく昨年末の「INF全廃条約」調印の原動力を最も根本のところで形作っていた。

ところが、このINF「全廃」には、手放しで喜んではいられぬ重大な落とし穴が隠されていた。全廃されるのが「地上」配備のINFのみであるということだ。米国とNATO諸国はこの条約で、すでに配備済みのミサイル約四三〇発を撤去することになるが、一方

米国は一九九二―一九九三年までに、海洋INF・トマホークを七五八発配備する計画である。

ソ連もトマホークとよく似た海洋発射型巡航ミサイルの配備を始めたといわれる。

INFは「全廃」されるどころか、その数を倍近くに増やしながらか、隠れ家を海へと移すだけのことなのだ。海を舞台に移した軍拡競争のもっともホットな現場が、北西太平洋、日本、そして横須賀。ファイフとバンカーヒルの母港化はいよいよそれが本格的な段階に入ったことの合図だ。

もう長々と付け加えることもないだろう。問題は、私たちが目の前で押し進められているこのむちゃくちゃな軍拡競争を、黙って見過ごすのかどうかということだ。

世界の核軍縮と平和への決して小さくはない確かな芽を踏みつぶして、日本は止めどもない核軍拡の道をひた走りに走っている。世界の「脱原発」のすう勢に一人背を向けて原発推進の道を突進しているのとちょうど同じ様に、私たちはどこに行こうとしているのだろうか。

核の海と化した太平洋、満杯の核兵器庫、核廃棄物の山、核戦争の悪夢、核事故の恐怖……。このような途方もない負債を子供たちに手わたすことを、私たちは一体誰に許されたのだろうか。

めぐる議論がにわかに注目を浴び始めた。トマホークは一発あたり五キログラムのプルトニウムを持っている。それは核戦争が起これなくても、日常的で現実的な脅威を人々に与えるのだ。

「一付記」
トマホーク艦の新しい母港計画は、実は米国内ではことごとく挫折している。戦艦ミズーリのサンフランシスコ母港計画も、同じくアイオワのニューヨーク母港計画も地元住民の反対運動の前に足踏み状態である。米国内で認められない母港が日本ですやすすと通ってしまふなどということがあってよいものだろうか。とにかく、本気になって反対すれば母港は止められる。このことは忘れないでほしい。

多くの議論の中でも、生物学者であるジャクソン・デビス博士が、サンフランシスコ湾でのミズーリの火災によるプルトニウムの燃焼と大気中への拡散を想定し、その結果多くの市民がガンで死亡することを予測した定量的分析は最も衝撃的で、説得力に富むものだ。報告書の全文が横須賀の市民グループによって翻訳、出版されている。是非一読を。

*パンフレット頒価二〇〇円。

行動と意思表示を！

① 署名タロ運動

三つの署名があります。
①国会請願、政府、国連への一〇〇〇万人署名。一第三回国連軍縮総会にむけて行動する会」呼びかけ。

③ 出立前学習会

どんな小さな集りでも、トマホーク艦の母港を考える学習会を開いてください。スライドをもって出前します。

④ 五月二十九日 横須賀へ！

この日は、みんなこぞって横須賀に集まって母港反対の大きな意思表示の日にしましょう！
■連絡・問い合わせはトマ喰い虫社まで
〇〇三（四九八）六〇九五
〇四四（六三）五一〇一

トマ喰い虫●目次

特集●原潜 アメリカの核戦略と原潜 青木雅彦（トマホークの配備を許すな！全国運動）	1
安保と原潜 山川暁夫（評論家）	2
原潜の事故と放射能汚染 服部学（立教大学教授）	3
原潜と原発 高木仁三郎（原子力資料情報室）	4
原潜はなぜ寄港するのか 石川 巖（朝日新聞記者）	6
トマホークと原潜 梅林宏道（トマホークの配備を許すな！全国運動）	7
トマ喰い●インタビュ① 『あたらしい憲法のはなし』 田浪政博（東京・東村市）	9
メディアのなかから●吉永小百合（女優） 「はい」と「いいえ」を きちんといえる人間になりたい ずいひつ●花崎卓平（北海道）	14
トマホーク・データ トマ喰い虫●インタビュ② アイディアを出して何でもやります ジョー・ヘイタ（オーストラリア・PND）	17
ファイフ・ヒルがやってくる 田巻一彦（反トマホーク通信）	19
表紙の絵（高木章次）	

【発行物の案内】

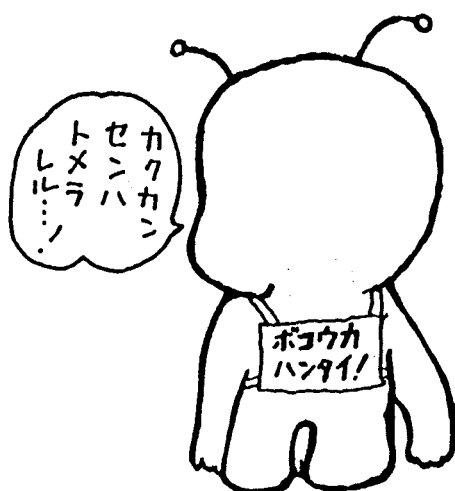
トマ喰い虫

1号 飛鳥田一雄（インタビュ）
●糸土広／菅孝行（対談）
●山本コウタローは語る●定価
200円

2号 関屋綾子（インタビュ）
●宮崎駿は語る●柳谷あき子／
鈴木道子（対談）●定価250
円

3号 非核ニュージランドを
つくり出した人々（インタビュ）
●名取弘文／小嶋さちほ（
対談）●定価250円

4号 いま反核を主張する／ダ
グラス・ラミス 豊崎博光●井
手敏彦（ずいひつ）●定価25
0円



「トマ喰い虫」改装6号（通巻11号）1988年5月1日発行●定価300円
発行●トマ喰い虫社〒150 東京都渋谷区渋谷 2-5-9 パル青山502
☎ 03-498-6095 郵便振替 東京 6-136148
（口座名 トマホークの配備を許すな！首都圏運動）